

尼崎東RC西川様、小坂様、松本様、西宮恵美寿RC日下田様、矢嶋会員ゲストの田中様、ようこそいらっしゃいました。

2020年東京オリンピックの正式種目として野球が復活したものの、中学生の野球人気は低迷しています。軟式野球部の減少は想像以上です。

少子化のあおりも受けているのも当然ですが、統計では2001年度は約32万人が、2016年には約18万人に減少しています。要因は日本スポーツ界全体で選手育成の多様化が進んでおり、また野球におきましては子供たちがボールを投げたりバットを振ったりできる広域が少なくなっています。

中体連によりますと、ユニフォームやバット、クラブ、スパイクなど道具の負担がほかのクラブと比べると大きく、プロ野球のテレビ中継が減り、野球と接する機会が少なくなったことなどが背景にあります。プロ野球本拠地は11都道府県にありますが昨年最後の砦、兵庫県の中学野球部が首位陥落、兵庫中体連の統計ではソフトテニス9521人、野球9501人(2001年は16000人)サッカーが8913人。

兵庫県以外の10都道府県は首位がサッカー部です。サッカーの躍進はJリーグの下部組織が増えましたが、ジュニアコースのセレクションに落ちた選手が中学の部活に入ることや、気軽さなどの点から部活に勢いがあります。サッカー部は全国で約22万人です。過去10年間中学男子の部活減少率は5.8%ですが、野球部は約40%減少しています。

中学野球部と別に小中学生の硬式野球、ボーイズリトルは全国2.3万人の部員がいます。彼らは甲子園に出場する確率の高い強豪校に進学し、そして、将来はプロ野球を目指すという選手が多いです。ですから部員の減少率は少なく、ほぼ横ばい状態です。いま現在高野連の加盟校は年々減少し、3989校(昭和63年以降)ですが、高校野球の部員は2005年度より16万5000人前後と安定していますが、一年生部員の継続率が10数年前と比べて約20%上がっており、91%です。

野球部の上下関係の厳しさや、色々改善されている結果かと思えます。

どちらにしましても、高校野球を支えているのは中学の軟式野球の選手たちです。こういう状況が続きますと、いずれは高校野球にもしわ寄せがきて、そしてプロも含めた国内の野球レベルに影響が出かねないと思えます。